

アジアを 読む

15

アンワル元副首相自由に —カリスマの復活なるか

1998年9月20日午後4時過ぎ、

マレーシアの首都クアラルンプールの国立モスクに2万人の群衆が結集した。その多くは「リフォーマシ(改革)」と書かれたはちまきをつけていた。モスクのバルコニーから「マハティール首相は即時退陣しろ」と叫ぶ著名政治家の演説に、「リフォーマシ！」と呼応する声が大きく広がった。

当日の深夜、その政治家は怒号と混乱のなか自宅で逮捕された。直前にマレーシア副首相兼蔵相を解任されたアンワル・イブラヒム氏(57)である。同性愛行為を強要した罪と汚職が逮捕容疑だった。同性愛行為について、一、二審で禁固9年の判決を受け、6

年間の収監の後、最高裁で逆転無罪判決を受けて今年9月に釈放された。

この無罪判決のニュースを欧米の英字紙は一面トップ、または準トップ級で大きく報道した。「驚き」と同時に「今後のマレーシア、東南アジア政治に与える影響が大きい」と判断したからにほかならない。

アジア通貨危機からアンワル氏の逮捕まで、マレーシアは大揺れに揺れた。当時、私はクアラルンプールで駐在記者をしていたが、この「アンワル逮捕」が最も印象に残っている。

アンワル事件の真相はまぎれもなく権力闘争だった。突然に襲ったアジア通貨危機でマハティール首相(当時)

が実績を誇ってきたマレーシアの経済体制は危機に瀕した。同首相が民族経営者の育成をめざして推進した公営事業の民営化路線は破綻、有力なマレー系企業が経営危機に陥った。当時のアンワル副首相は国際通貨基金(IMF)と密接な連携をとりながら、緊縮政策を導入し、金融構造改革に取り組んでいた。欧米も同副首相の経済運営を側面から支持していた。

一方、マハティール首相にとってIMF流の構造改革とは全面的な市場開放と同義語であり、マレー人の経済力強化を政治哲学にしてきた同首相には耐えられないことだった。IMFの改革の終着点はマハティール首相の過去の経済政策の否定であり、その権力基盤が揺らぐことにもなる。

両者の亀裂が決定的となった段階で、アンワル副首相が権力への野心を思わせるような動きを見せ、これに対応してマハティール首相が同副首相の容疑を固めた上で「解任・逮捕」という強権を発動した。

アンワル氏は日本ではそれほどでもないが、東南アジア、欧米での知名度は高い。マラヤ大学の卒業生を中心に設立されたマレーシア・イスラム青年

運動(ABIM)の指導者を70年代から80年代初めまで務め、マレーシアの政治、社会に大きな影響力を発揮してきた。演説の名手でもあり、その組織運営力、行動力にマハティール首相が注目、自らアンワル氏に政界入りをお勧めした経緯がある。

その経歴が示すように敬虔なイスラム教徒であり、中国訪問時には同じイスラム教徒で明時代に大航海を指揮した鄭和の墓に向いたほど。マレーシアだけでなく、東南アジア、世界のイスラムネットワークの重要な節目の役割を果たしてきた。

主要英字紙が「アンワル、逆転無罪」と大きく報じたのは、そのカリスマ的な存在感が理由であろう。この無罪判決後、汚職罪での判決が確定(刑期は満了)したため、アンワル氏は立候補権を5年間剥奪され、早期に政界復帰する道は絶たれた。ただ、本人は「民主改革」に取り組むことを表明、野党勢力との連携も示唆している。

ある英字紙が「檻から放たれた虎」とアンワル氏無罪を表現したように、マレーシアで同氏を軸に新たな政治のうねりが起きる可能性は否定できない。

(日経香港社 奥村幸広)